

## アサビーヤ・王権・カリフ位

—イブン・ハルドゥーン「歴史序説」讀—

橋爪大三郎

【1】イブン・ハルドゥーン(1332-1406)の「歴史序説」を一読して衝撃を受けた。なんと合理的な、社会(科)学的精神だろう。またなんと鋭い、直観的洞察力だろう。その水準は、時代をはるかに抜きんでいる!

これまで政治学の言説は、キリスト教圏に根ざす西欧的な政治秩序を自明とするあまり、イスラーム教圏をはじめとする非西欧圏の政治分析が弱点となっていた。この書は、そのことを如実に気づかせてくれ、政治・権力的一般理論にむけても、有益な示唆を与えてくれる。

「歴史序説」は、汲めども尽きぬ着想の源泉とみえる。まずそれは、都市/田舎(=砂漠)の生活形態を対比しつつ比較社会・宗教学を試みる点で、M.ヴェーバー(特に「古代ユダヤ教」)の先駆とみなしうる。そのカリスマ論とも、符合するところが多い。また、アサビーヤ(ʿaṣabiya: 連帯意識)を社会秩序の形成原理とみなす点で、デュルケムの理論を先取りしている。さらに、価値法則や労働価値説の原形をのべる点は、リカルドの先行者とも言えよう。ときに、ケインズの有効需要の原理に近接するようにすらみえる。いっぽう、国家の主権者の権力を追剥の域から区別する件りは、J. オースティンの学説を批判するハートの立論と相同である。……

こうした脈絡を深追いするのにも、楽しい作業だろうが、ここでは、政治学的な関心に焦点を絞ることにする。イブン・ハルドゥーンはカリフ位を、どう論じたか?

【2】「歴史序説」は、カリフ位を、王権の一特殊場合とみる。また王権を、部族的な連帯意識が自然に上向・発展した極、として描く。すなわち、イスラームの正統な形象を、世俗的・社会科学的方法が、アサビーヤ→王権→カリフ位の順に説明しつつすかたちになっている。

こうした理解は、今日のわれわれからみれば、しごく妥当にうつるが、イスラームの正統とは相容れないものだ。イスラーム興隆の当初、アサビーヤ(部族紐帯)といえ、よからぬもの、イスラーム運動によって克服すべきものとみなされた。イスラーム共同体(ウンマ)は、それに先だつ部族的な統合原理を融解させてしまうことを主題として、成立したのである。

イブン・ハルドゥーンはもちろん、こうしたイスラーム教の理路を知悉している。(彼はマムルーク朝のカイロで、六度もマールク派の大法官をつとめた。)しかしその彼が同時に、イスラーム教を客観視する外的視点をもわがものとしている点に、価値がある。なぜならば、イスラーム運動は現実には、イスラーム的なものと、たえずそこに混入してくる非イスラーム的なものとの緊張と角逐と癒着をおとして、展開していくしかなかったのだ

から。その実態を把握するには、イブン・ハルドゥーンのような二重の視点がどうしても必要である。

【3】イスラームの運動を理念的に把握するため、私は「言語ゲーム」論を援用してみた(別稿近刊)。その内容をかいつまんで紹介しよう。

まず、イスラーム教を、「審判のいるゲーム」として、一次近似する。そこにはルール・ブック(=コーラン)もそなわっており、ゲームのやり方が十分明確に記述されている。審判にはムハンマドが、ルール・ブックによって指名されている。あとはひとびとがこのゲームに確実に内属すれば、そのルール環(=ウンマ)が円満に成就するはずであった。このゲームに参加するひとびとは、そのまま審判の権威を承認していることになる。かくして、ルールの解釈と運用が一義的に確定する!

さて、このゲームにおける最大の問題は、審判=ムハンマドが早々に不在とならざるをえないことである。そうなれば、いったん開始されたゲームの継続性が脅かされかねない。ここから、法学者、ならびにカリフ(イマーム)という特有の形象がふたつ出現してくる。

カリフとは、不在となったムハンマドの代理となって、ウンマを外護し、統括すべき者である。ルールが一義に確定し、その結果、ウンマは全一であるはずだから、カリフもまた地上に唯一でなければならない。また、ゲームが「審判の裁量」ゲームとなってしまわないために、カリフは法学者と別の形象でなければならない。

正統派(スンナ派)を念頭に、もう少し考えよう。

【4】コーランはイスラーム教のルールの完全な記述であるとされるけれども、そこにカリフの規定は欠けている。カリフは、確定したルール環の存在を前提にし、すべてのルール環が遂行されることを担保する存在であるために、かえって、そのルールのなかでは直接に規定されることがなくなる形象なのだ。そこで、カリフの存在を正統化しようとすれば、明文ではない部分、すなわち、イスラーム法学の原理(イスラーム共同体不可謬の法理)に訴えざるをえない。カリフ位の理念はこうして、イジュマ(合意)を法源として確立したシャフィイー一流の法学によって、裏打ち・補強された。

カリフ位を創出したイジュマがあったとされるのは、アブー・バクルを選出した、メディナでのイスラーム教徒の集会である。このときの手続きや、カリフの職務についての意思一致が、のち慣行に転化した。カリフは、ウンマの承認と支持によって、その地位にある。

カリフが欠ければ、ふたたびつぎのカリフを立てることになる。このとき、カリフ位継承のルールというもの

が、ありうるだろうか? 血縁的な継承の原理のようなものは、すでにのべた理由により、イスラームのルールではありえない。継承の正当性は、(たとえ形式的であろうと)イジュマ(ウンマとの誓い)によって主張されるほかないのである。

これを、キリスト教的な二重の王国論(聖/俗)の構図と比較すると、興味ふかい。ここでは、任意のルールを正当化する権能をもつ宗教上の権威が、世俗社会の「外」に存在する。イスラーム世界にはこのような、権威の不動点は欠けている。

したがって、カリフ位の継承は、イスラーム教の内的視点からみれば、まったくの事実問題と映ずる。カリフ位の存在が、イスラーム教のルール環の事実性を象徴していたと同じように、その継承は、ルールに拘束されない純然たる権力の暗闘の場、すなわち政治の領域として発見されるのである。

【5】カリフ(イマーム)位が正統に継承されたことを、法理のうえから確認することは困難である。このため、イジュマの分裂、したがって宗派上の分岐が幾筋も生じた。こうしてウンマは亀裂にみまわれるが、これはあくまでも、ひとびとがイスラーム教の単一のルール環に内属しようとするかぎり、その反作用として生じる現象であることに注意すべきだ。

さて、事実として、カリフ位の創設や継承が、あるゲームのなかで起こっていた、ということはある。ただしそのルールは、イスラーム以前のなものであったため、イスラームの言説によっては積極的に語れない。イブン・ハルドゥーンは、半ばイスラーム教に外在することで、それをアサビーヤの名で語りはじめたのだ。

イスラーム初期の政治的課題は、アラビア半島に散在する諸部族を糾合することだったが、この状況は、イブン・ハルドゥーンの北アフリカでの経験と似通っていた。彼は、アラビアのロレンスよろしく、砂漠の諸部族を術策によって味方につけるのがうまかったらしい。そうした経験の積み重ねから、イスラームの運動を育みもするような、人類汎通的な社会法則をみとめたのである。

【6】ムハンマドが没した当時、ウンマは、彼の属する部族集団(ハヌー・クライシュ)を中核とする同志的結合体にすぎなかった。同盟者も敵対者も、別個のアサビーヤを実態とする、別個の部族集団である。偽預言者らが、彼らを組織して、ウンマに対抗する構えをみせた。正統カリフたちは、これら偽預言者を全滅させ、イスラーム教のルール環を、超部族的なサイズに拡大すべく奮闘した。イブン・ハルドゥーンはこれを、王権をめざしてあらゆる部族的権力がたどる過程と、本質的に同一だと分析する。実際、カリフ位は世襲化し、後代には王権と異ならなくなる、と彼はみる。

では、カリフ位と王権のどこが異なるのか? 王権は、

①部族的連帯の範囲を超え、いくつものアサビーヤを統合する権力で、②徴税権・交戦権などの国家主権をもち、③世襲によって王位を継承していくもの、にほかならない。現象的には、カリフ位も①~③に近似していく。しかしカリフ位は、①' 預言者の宗教的カリスマに後継し、「宗教的宣伝」を利用した、通常よりはるかに強力なアサビーヤに立脚し、③' 少なくとも当初はアサビーヤの中核集団の指導力を維持するように、継承される。たとえば、ムアウィーアのあとをヤジードが継いだのは、世襲ではなく、血統を通じてアサビーヤをよりよく維持しようとする方策とみるべきだ、という。

【7】イブン・ハルドゥーンは、イスラーム世界の政治過程を、一般的な社会法則から解明しようと努力した。結論は、一種の周期説である。

まず、都市/砂漠の対比。砂漠は生活条件が厳しいので強固な連帯が育つ。連帯に支えられた部族集団は、より大きな覇権——王権——を求めて、しのぎを削る。一方、都市では連帯が弱まり、強力な部族に征服されてしまう。こうして王朝が創始されるが、それはほぼ三世代のあいだに勢力を弱め、次の王朝に席を譲る。……。実例も豊富な彼の研究は、当時のスルタン諸王朝興亡の様相を的確にとらえている。

イスラーム教をゲームとしてとらえるとき、カリフの形象だけは、そのルール環の上を浮遊するようにみえる。法学の紡ぎだすルールはそれを、確定できなかった。むしろ、法学の密かに抱える解釈的分岐のほうが、カリフは唯一との理念によって抑止されているのだ。

イブン・ハルドゥーンは、イスラーム以前のゲーム(アサビーヤ)を下敷きにすることで、カリフ位を権力の形象として記述する途をひらいた。

彼の権力学説をひとくちに言えば、アサビーヤ一元論である。権力の源泉は、連帯意識によって固く結ばれた、ひとびとの集団的威力にある。支配者はこの連帯意識を背景にして、当該集団の内外に指揮権を振るう。この集団が他の集団を併呑し、あるいは下屬させる場合に、集団的威力は拡大して、国家権力の水準にいたる。

彼は、権力が観念的な作用であることを、よく理解していた。しかし、彼のアサビーヤはあまりにも実体的である。それを成立させる微細なメカニズム、法と権力との関係、さらには都市型権力などについては、まったく触れられていないと言っている。それはそっくりそのまま、われわれの課題である。